
熟女大全集

シュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熟女大全集

【Nコード】

N1227L

【作者名】

シュール

【あらすじ】

間子と書いて”まこ”と読む女がAVの面接を受けに来た。

謎の女間子。

取り巻く男たちは・・・。

間子って変わった名前だよね」俊夫はすっかりぬるくなった生ビールを嘗めながら、目の前で座っている女に言った。

「よく言われます。」

“まこ”って聞くとたいがいはカタカナの“マコ”を連想されるんですけど“間”の“子”だって言うと言つて皆さんほとんどは驚かれます」女は顔の表情を一つ変えずに言った。

「で、動機はなんなの？」

「はい。」

今、OLやってるんですけど、お給料が安くって、田舎の父親に仕送りをする、ほとんど残らなくなつて。家賃ももう二カ月滞納しているんです」やはり女は表情を一つ変えずに言った。

「厳しい世界だから、毎年うん百人以上デビューするけど残るのは十人もいないから」

「はい。」

自信はあまりありませんけど、頑張ります」

「使い捨てだよ。」

シャブ中になるのもいるし、自分で手首切るやつもいる。

やつぱり、人前でおまた開いて、初めて会った男のナニをくわえて顔にザーメンを浴びせかけられて、恥ずかしいことをしたんだ私は、ってある時ハツと気づいてしまふんだろなあ。

だけど、時すでに遅し、自分の痴態は全国に流通してしまふ、なんてことをしてしまったんだ、ってね」

「大丈夫です」女はやはり表情一つ変えずに言った。

俊夫は女に「じゃあ結構です」と言つて帰つて欲しかった。

どう見ても売れそうにない。

顔は美人でもないし可愛くもない。

乳がでかけりやそれでいいという最後の砦にも叶っていない。

「ほんと、たいへんな仕事だよ」（やめれば）

「いえ、大丈夫です」

「もつとましな仕事なんて探せばいくらでもあるよ」

「いえ、やらせてください」口調は少しきつくなつたが女の表情にはなんの変化もなかった。

「田舎のお父さんにいくら仕送りしてんの？」

「月に約十万です」

「寝たきりなの？」

「三年前に、農作業中に耕作機械に巻き込まれて右腕を落としたんです」

「へえーっ、そりやお気の毒に」

「もう俺はだめだって、何もなくなつて毎日朝からお酒を煽るしまつで・・・」

「気持ちわかるよ。」

俺だってそうなると思うよ。

お母さんは？」

「父が腕を落とす二年前に亡くなりました。」

乳がんでした」

「そうなの。」

兄弟は？」

「一人っ子なんです」

「なんだ“間”の“子”っていうから、お兄さんと妹さんにでも挟まれてんのかと思つたよ」

「いえ、一人なんです」この時だけ女は、一万ピースあるジグソーパズルのワンピースが抜けたように、ほんとにわずかだが、明らかに彼女の中で何かが反応したというような表情をした。

「OLって、どんな仕事してんの？」

「営業事務です」

「差支えなければ会社名は・・・」

女の口から出た企業名は、毎年、学生が就職したい人気ランキン

グの上位を占める一部上場企業だった。

「辞めると言っても急には辞めれないんだろっから、正式に退職が決まってからまた連絡貰える」俊夫は急にまじめに入った。

「いえ、もう退職願は提出して正式に受理されました」

土曜日のホテル街は人で溢れていた。

やっと入れた、ほとんど田舎の民宿のようなホテル“王将”のフロントで「休憩」と告げた俊夫は、部屋に入るなり備え付けの小さな冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「何人くらいの男と関係したの？」

「二人です」間子は相変わらずの無表情で答えた。

「一流企業なんだから、不倫なんかいくらでもあるんだろ。やらしいおっさんに言い寄られたこととかあんのん？」

「ありません。私より可愛い子なんかいくらでもいましたから」

確かに、と俊夫は心の中で呟いた。

色気もないし愛嬌もない。

もし会社の同僚だったとしても絶対に飲みには誘わないタイプだった。

俊夫の携帯が鳴った。

社長からだった。

「どうだ？」

「ちょっと胃の調子が悪くて、おにぎりでも食べようと思ったんですけど、胃が受け付けません」

電話の向こうで社長が笑っている。

「胃薬買つといてください」電話を切ると、俊夫は「先にシャワー浴びるから」と言つて“浴室”と白いプラスチックのボードが張られた部屋の扉を押した。

志願者とは「必ず寝ろ」というのが社長の教えだった。

「寝ないと本性はわからない」

言つは易し行つは難し。

おにぎりとは、競馬や競艇の予想紙でよく見かける白い三角印のことだった。

確率はかなり低いがひょっとしたら、という印だった。

それも無いということは、ほぼノーマーク、全く可能性がないということだった。

“浴室”から出ると、間子は下着だけの姿でセミダブルのベットに腰を下ろしていた。

「お先に」

間子は何も言わなかった。

「シャワーは？」

「いいんです」

「汗かいてんじゃないの？」

「大丈夫です」少しだけ間子は表情を変えた。

「そうなの。じゃあ」と言って俊夫が腰に巻いたバスタオルをはずすと間子はいきなりベットから立ち上がった。

「すいません・・・」

「どうしたの？ 怖くなったの」

「実は・・・生理なんです」

「へっ!？」思わず俊夫は声を漏らした。

「すいません」間子は少しだけ申し訳なさそうな顔をした。

「あつ、そうなの・・・」俊夫には初めての経験だった。

だいたい、この世界に入ってくるんだから、いつ何時、体を求められるか分からない。それなりの準備は彼女たちはしているはずだ。俊夫はずっとそう思っていた。だが・・・。

「じゃあ、しょうがないから口で、って、これまでやったことはあるよね？」

「一度だけ」

「じゃあ、とりあえず」

俊夫はむき出しになっていたペニスを間子の前に突き出した。間子が銜える。

「痛えっ！」

俊夫は思わず声を上げた。

間子は俊夫のペニスから口をはずした。

「すいません」

「いいよいいよ。」

できるだけ歯は立てずに、口全体で包み込むように」

もう一度間子は俊夫のペニスをそーっと口に含んだ。

「そう、いいよ、その感じで」

やがて俊夫はオルガズムを迎えた。

間子の口からペニスを抜き取ると、ザーメンを間子の顔に放った。

間子は少しの間じっとしていた。

俊夫のこれまでの経験では、この行為で泣いて「やっぱり無理です」と言って帰っていた女の子が約二割いた。

しかし、間子は、急なにか雨で濡れた服のしずくを取るかのようにな顔に乗った俊夫のザーメンをティッシュでさっと拭きとった。

「返事はいつ頂けますか？」

ホテルを出て間子と別れてもこの台詞が耳に付いて離れなかった。

「ハーパードック、ダブルで」

いつも“試乗会”の後で立ち寄るバーで肘をつく。

自分のザーメンで顔を汚した間子の無表情な顔が目につく。

「かなり疲れてますよね」カウンターの向こうから店のオーナー兼たった一人のウェ이터が声をかける。

「疲れていうかなんて言うか」言いながら指でグラスの中の丸い氷を転がす。

考えてみれば、今の社長と出会ったのもこのバーだった。

俊夫は有名国立大学を卒業した後、間子が勤めていた会社ほど有名ではなかったがとりあえず一部上場企業のメーカーに就職し十四年間勤めた。

バブルが弾け急速に冷え始めた会社はリストラをこれでもかと繰

り返し、俊夫も下手な将棋士の駒のように日本各地をあっちへ行ったりこっちへ行ったりした。

自分の存在とは？

四十を前にしたおっさんが思春期の少年がたまに口にする台詞を吐いて会社を辞めた。

三百万の退職金は半年でなくなった。

妻が急に口をきかなくなった。

慌てて就職活動を始めたが、バブルが弾けた日本の各企業は四十前のおっさんを中途採用する余力というかそんな暇はなかった。

幹部候補生として入社した会社をいったん飛び出すと、学歴など

“へ”の役にも立たなかった。

「ゆとり教育で育った若い人たちには決して負けません」

こんな台詞もただの空威張りに終わった。

二年間で百社以上の会社に履歴書と経歴書を送ったが、どこからも内定通知も来なかったというか、ほとんどが書類審査で落ちた。面接までたどりつけたのは一割もなく、たどりついたとしても、待合室にいるのは自分より一回りも下のやたら体にびたりと張り付いたスーツを着た若者だけだった。

時給八百円の個室ビデオのアルバイトを始めてちょうど一週間たった日の夜、ぶらりと立ち寄ったこのバーで今夜と同じハーバーのロックをダブルで飲んでいる時、社長に声を掛けられた。

「会社員？」社長は酔っていない素面の目で聞いてきた。

「いえ、アルバイト・・・あつ、今風に言つとフリーター・・・みたいなもんです」

「結婚は？」

「妻と娘が」

「家のローンは？」

「あと二十五年残ってます」

「車の免許は？」

「普通免許ですが」

「月二十五万、ボーナス年二回、各五十万」

俊夫は頭の中で一瞬にして年収四百万と計算した。

「ノルマは？」

「ないけど、就業時間はあつてないようなものだ。残業はつかない。但し、社会保険は完備している」

時給八百円で月二十万円を稼せごうとするのは大変だということ
を、俊夫は働き始めて一週間で痛感している。

「職種は？」

「サービス業」

「いつから？」

「明日からでもいい」

どこの誰だかわからない輩のザーメンが滲みこんだティツシユペーパーをごみ袋に回収し、まだ人の温もりが残っているヘッドホンと革張りのリクライニングシートを除菌ペーパーで拭く。匂いを嗅ぐまいと必死で口呼吸している自分はいったい何なのか？

「会社の電話番号は」

「ここに連絡してくれ」

渡された紙の切れ端には携帯の番号が書かれていた。

次の日、個室ビデオ屋に、悪いが辞めさせてくれと携帯で連絡を入れた後、返す刀で社長に電話を入れた。

二時間後にオフィス街の喫茶店で社長から名刺を渡された。

“人材派遣業”と書かれた下に“取締役社長 海田 勇二”と書かれていた。

「じゃあ、早速だが、得意先に挨拶に行こうか」

タクシーに乗って十分ほどで降りると、趣味の悪い、世界中の大理石をかき集めて作ったかのような要塞が目の前に現れた。

応接に通され暫くすると「お待たせー」と髪に茶色いメッシュを入れた、繁華街でよく見かけるホストもどきのような男が現れた。

「社長、なんかいい話ないのーっ」男は海田の肩を馴れ馴れしく叩くと「あんた誰？」といきなり俊夫の顔を見た。

「すみません、藤堂さん、ご紹介が遅れまして、今度新しく入りました美川と申します、まだ、名刺ができておりませんので、今後頑張りますのでどうかひとつよろしくお願いいたします」

俊夫はしうがなく「よろしく願います」とぼそつと言つてぺこりと頭を下げた。

「なんか暗いなー、社長、大丈夫なの？」

この世界、こんな暗い人は持たないよ」

藤堂という男はどう見ても自分よりは十歳は若かった。

「いやあ、藤堂さんと初めてお会いするんで少し緊張しているんです。普段はもつと明るいやつなんですけど」海田は、なつそうだろつ、という顔をして俊夫の目を見つめ、俊夫もしうがなく、ええ、と作り笑いを海田と藤堂の二人に向けた。

「とりあえず、俺こついうものだから」

藤堂から受け取つた名刺にはカタカナの会社名が書かれ、その下には“企画部部长”という肩書が記されていた。

「美川ちゃん、歳は結構いつてるみたいだけど、さつきも言つたけど、この世界は暗くちゃ絶対に持たないからそこだけはよろしく。

あとそうだ。人前で、自分のケツの穴に男のナニを入れられている女を見ても絶対に勃起をしない忍耐力がこの世界には必要だから」この時、やつと俊夫は自分がこの世界に足を踏み入れたかがわかつた。

二杯めのハーバーを空にした時、海田が店に入ってきた。

「なに渋い顔してんだよ」ギネスビールをマスターに注文しながら海田は俊夫の顔を覗き込んだ。

「渋いも何も・・・」

「どうだつたんだよ、おにぎりにもならない女の方は？」海田は口の周りにコーヒー色の泡を付けて俊夫に聞いた。

「綺麗でもないし可愛くもないし愛想はないし胸は小さいし、おまけにあの日だし」

「いいことづくめじゃないか」

「やる気だけがあります。」

返事はいつ頂けますかって」

「じゃあ、ちゃんと考えてやれよ」

「無理ですよ。」

いくらなんでもあの子は絶対に売れません」

「そんなのわかんないじゃねえか。」

俺も会ってないから何とも言えねえけど、それを何とかするのが俺たちの仕事だろ」

「それはそうですけど、あれは絶対に無理です。オーラが全くない、無理です」

「超一流企業現役OLとでも銘打ってとりあえず二、三本撮ったらあとは何とか考えるからさあ、とりあえず明日の朝に合格の知らせだけ入れといてくれ」

「わかりました」肩で息をすると俊夫は三杯目のハーバーを注文した。

一ヶ月後、間子のデビュー作“現役OL 淫らなオフィスラブ？”の撮影が、ある郊外のスタジオで行われた。

「いよいよだな」海田がどこを見るともなく言葉を吐いた。

「そうですよね」俊夫も何の感情も注入せず言葉を吐いた。

ストーリーは、間子扮するOLが社内の男に散々弄ばれるという、月並みの内容だった。

少し離れた所に間子が立っている。

銀行員のような制服を着せられている。

相変わらず無表情だ。

一週間前に初めて俊夫は間子と寝た。

海田から撮影前に一回は必ずと言われていたのをいやいや実行しただけだった。

予想した通り、何の感情の起伏も間子は行為の中で見せなかった。「ダメじゃん、暗いよ暗い、もっとファンキーにならなきゃ」藤

堂がいきなりスタジオに入ってきた。

「社長、デビュー作なんだからもつと華やかにしなくっちゃっ。この子の門出なんだから」

言つと藤堂は間子につかづかと近づいて行つたかと思うといきなりズボンのジッパーを下ろし自分のペニスの間子に突き出した。

間子は一瞬えっという顔をしたが、すぐにそのペニスを口で銜えると頭を何度も上下させ、やがて藤堂のザーメンを口の中で受けた。「まこちゃんだったっけ、俺の祝儀と思ってくれ」言つと藤堂はズボンのポケットからハンカチを取り出し、まだぬれて光っているペニスをさつと拭くと「じゃあ、後は頼んだよ」と言つてスタジオから出て行つた。

暫く、スタジオの中には藤堂が作つていった　！？　な空気が漂つていたが、すぐに撮影が開始された。

間子はなんの動揺も見せずに今日ここで初めて会つた男性三人と交わつた。

撮影が終わると「藤堂さんから、また祝儀もらつてるんで」と海田は夜の街を歩きながら無地の封筒を俊夫と間子にかざした。

「間子ちゃん、何食べに行く？なんでも好きな言つてよ」

「もつ鍋」

！？

俊夫と海田は顔を見合わせた。

「もつといいもの食べに行こうよ。」

今日は間子ちゃんの門出というか記念すべき日なんだから、ステ―キでも食べに行こうよ」

言いながら海田が差し出した無地の封筒の厚さは５ミリはあった。「いえ、もつ鍋で」

不景気の世の中を象徴して店内はサラリーマンをはじめたくさんの客で賑わっていた。

「よく父が作ってくれたので」

３０分程待たされてやっとテーブルに着いたとき間子がぼそつと

吐いた。

「そうなの。」

まあ、人にはいろいろ思い出っただがあるからな」海田が薄っぺらな言葉をメニューを見ながら吐いた。

鍋をつついて三人の顔がアルコールと店内の熱気で赤くほてったとき間子が無表情な顔を海田と俊夫に向けた。

「あのう・・・」

「あつ、追加するんじゃないって言っただよ。いくら食べたっけしれてるから」海田が、すっかり何もなくなった鍋を見ながら間子に言った。

「いえ、そうじゃなくて」

「なに？」俊夫が海田に代わって聞いた。

「今日のギャラというかお給料はいつ頂けますか？」

「いつ？」

「はい」

「えーっと」と言いながら俊夫は、こいつどういう神経してんですかねと言った顔を海田に向けた。

「今日は何日だったけ？」

「二十一日です」

「あつ、そうか・・・うちは二十日締めのお月末の支払いだから・・・再来月の末になるよ」

「そうなんですか」

「すいません」海田が通りすぎた店員を呼んだ。「上ミノとコブクロ二人前ずつと、あと、キャベツもちょうだい」

追加の注文を、店内の客全員に聞こえるようにとてつもなく大きな声で復唱した若い店員がテーブルから離れると「前借りできませんか」と間子がぼそつと吐いた。

「前借り？」

「ええ」

「い、いくらくらい？」

「とりあえず十万円あれば。」

父に仕送りができてなくて」

「そ、そうなの・・・」俊夫が困った顔を海田に向けた。

「じゃあ、これ」海田はさっき二人に見せた厚さ五ミリはある無地の封筒を間子に差し出した。

「こんなには・・・」

「いいんだよ。これは間子ちゃんへの祝儀だから。その代りこの勘定は専務頼むよ」

「そ、そんな」俊夫は泣きそうな顔で言った。

結局、もつ鍋屋を出た時には電車の走っている時間はとくに過ぎていた。

流しのタクシーを止めた海田が「これは俺のポケットマネーだから」と一万円札を間子に渡し再び車を走らせた。

「いいんですか？」

あんな気前のいいこととして」

「いいよ。どうせあれは賤別だから」

「マジですか？」

「何年この世界で飯食ってきてると思ってるんだ。」

あいつは絶対に売れない。絶対に」

俊夫は海田の声を聞きながら、間子の乗ったタクシーのテールランプがだんだんと遠ざかり、やがて、夜の闇に溶けてなくなっていくのを見届けた。

2

その電話が鳴ったのは、俊夫が久しぶりの休日に、遅い朝食を取り終えて洗面台に向かって髭を剃っている時だった。

「えらいことになったよ」

三十分後、タクシーを降り、事務所兼社長宅の2DKのマンションの扉を開けると海田がリビングの真ん中で新聞を大きく開き仁王立ちしていた。

「どうしたんですか？」俊夫の声に海田は新聞から顔をのがした。
「これ見てみるよ」言いながら海田は手にしていた新聞を俊夫に渡した。

「うん!？」

スポーツ新聞の“お父さんのコーナー”に毎週一度だけAVの売り上げランキングが掲載される。

そこに“現役OL 淫らなオフィスラブ??”が第2位にランクされていた。

「す、すごいじゃないですか」俊夫が声を上ずらせた。

「なぜだ？」

「なぜって、私にはわかりません」

「今、ああいう女がブームなのか？」

「さあ・・・」

俊夫たちの驚きを尻目に“現役OL 淫らなオフィスラブ??”は快進撃を続けた。

AV業界では1万枚売れば大ヒットの中“現役OL 淫らなオフィスラブ??”は2万枚を突破した。

「なぜだ？」海田は俊夫の顔を見つめる。

「私にはわかりません」

この会話が何度も繰り返されたある日、俊夫と海田は藤堂に食事招かれた。

「社長、やっぱりあなたには先見の明があるよ。」

さあ、今日は飲んで飲んで、あつ、俊ちゃんも遠慮せずに飲んでよ、今日は、もう無礼講だから」

藤堂から俊ちゃんと呼ばれるのはもちろん初めてだったし、食事に招かれるのももちろん初めてだった。

2件目のスナックで海田の下手な歌に手拍子をとっている時、隣にいたサラリーマン風の上司と部下といった感じの二人組の部下の方が「まこ」という言葉を発した。

「それ、むちゃくちゃ怖いんですよ、背後霊がはつきりと映って

いて、なんなら部長、私そのＡＶ持つてるんでお貸ししますよ」
「いらないよ、そんな気持ち悪いの」

翌日、俊夫は海田のマンションにいた。

「じゃあ、いきますね」俊夫は「現役ＯＬ 淫らなオフィスラブ？」のＤＶＤをデッキに入れた。

暫くすると間子が現れ、男優に体のいろんな所を触られ始めた。

「二日酔いにこの映像は応えるな」言いながら海田は胃薬を口に放り込みコップの水を流し込んだ。

「だけど、２時間は長いですよねえ」

「ほんとだ。」

昔俺たちの時代のＡＶはたいいてい６０分だったけど、最近はユーザーにお得感を持つてもらいたいから短くて２時間、長ければ５時間６時間つてのがあるからなあ」

「だけど、いったいどこで出てくるんですかねえ」

「わからん。まあ、気長に探してみましようや」

しかし、間子が二人目の男のザーメンを顔に受けたところで俊夫はいったんＤＶＤを止めた。

「くっそー、いったいどこなんだよ」

「やっぱり、聞き違えたんじゃないのか」喉が渴くのか二本目のミネラルウォーターを口にしながら海田は俊夫に言った。

「じゃあ、二万枚は眞子の実力だとおっしゃるんですか？」

「い、いや、それは違うんだとは思っただけ・・・」

その時、俊夫の携帯が鳴った。

「あつ、はいはい、じゃあ、確認してまた電話入れます、はい、どうもお疲れ様です」

「誰だ？」

「噂をすれば」

「間子か？」

「ええ」

「なんて？」

「次の仕事はいつですかって」

「このことは知ってるのか？」

「さあ、どうですかねえ」

「まあ、どっちにしても、藤堂さんのことだから第二弾は考えてるはずだから一度電話入れといてくれ」

「わかりました」と俊夫は言って、大きく伸びをしてから「さあ、もう少し頑張りましょうか」とDVDの再生ボタンを押した。

そして、DVDの残り時間が後二十分というところでその場面がやってきた。

「おっ！」声を上げたのは海田だった。

「おい、見てみろっ、人の顔だ人のっ」海田は大きく目を見開いてテレビを指差した。

「どこですか？」俊夫は目を擦ってテレビに顔を近づけた。

「そのカーテンの横っ、人の顔が映ってるだろ」

「どこですか？」俊夫はさらにテレビに顔を近づけた。

激しく間子の股間に向かって腰を振る男の小麦色に日焼けした尻とカーテンの間に確かに何かぼんやりと光の輪郭らしきものが浮かんでいた。

「照明の光が何かに反射してるだけじゃないんですか」少し白けた感じで言っていると俊夫はテレビから顔を遠ざけた。

「違うよ。」

絶対に人の顔だっつて、よく見てみろよ」

俊夫はDVDを巻き戻し、もう一度問題のシーンをコマ送りで見

た。
「言われてみればそうかもしれないですけど」俊夫は腕を組んで「うーん」と唸ったが「やっぱり、僕には人の顔には見えませんねえ」と海田に向かって言った。

「お前は、湧からこんなことが起こるわけがないって決めつけてるから見えないんだよ」

「信じる者は救われる、ですか？」

「どういう意味だよ？」

「いえ、特に深い意味はないです。

まあ、無理矢理見えたということにすれば、そうですねー、し
いて言えば子どもの顔ですかねえ」

「子供？」

何でこんなところに子供の霊が出てくるんだよ」

「知りませんよ。」

たぶん、性に対して興味を持ち始めた全国の小学生の強い思いが
たまたまこのDVDに乗り移ったんじゃないですか」言いながら俊
夫がDVDのリモコンの停止ボタンを押したとき海田の携帯の着信
音が鳴った。

液晶の画面を見ながら「またしても噂をすればなんとかだよ」と
言いながら海田は電話に出た。

「いつもお世話になっております。はい、ええ、いや、それはもう
藤堂さんのご都合に合わせますので」

3

間子の2枚目のDVDの題名が『霊と一緒に背後からゴ―っ!!』
に決まった。

その撮影を次の日に控えて、俊夫はホテルの一室に間子といた。

「ビール飲む？」と俊夫が備え付けの小さな冷蔵庫を開けながら聞
くと、間子は言葉は添えずに首だけを横に振った。

いつも通りの何の感情も入っていないSEXを終えたばかりだっ
た。

缶ビールのプルトップを開けながら「明日は前よりはスタッフの
数も増えるから緊張しないように」

間子はやはり言葉を添えず首だけを縦に振った。

結局、間子のデビュー作は2万5千枚売れた。もちろん大ヒット
だった。

サラリーマンが、通勤電車の車内で読むには少し周りの目が気になる週刊誌にも取り上げられた。

「で、今日、藤堂さんから言われたんだけど明日の撮影は台本はもう全部読んだ？」

間子は首を縦に振る。

「若干変更が入るみたいなんだ」

「そうなんですか」蚊の鳴くような声で間子が言った。

「アナルって知ってる？」

「アナルですか？」

「お尻の穴のことなんだ」

「は、はい」

「で、アナルセックス、まあ、簡単にいえばというかそのままのただけとお尻の穴にペニスを入れるんだけど、やってみる気はある？」

「お尻の穴ですか？」

「そう」

「みんなやってるんですか？」

「ついこのあいだまでは洋ピン、外国のAVのことなんだけど、そこでは当たり前だったけど、日本で流行りだしたっていうかアブノーマルでなくなったのはここ二、三年のこと」

「痛くないんですか？」

「初めは結構痛いらしいけど、ローションもいいのができてきてるから、なんとかかなると思うよ。」

昔は嘘か本当か外国なんかじゃあ筋弛緩剤を打ってやってたって聞いたけど、今はどうか分からない」

「ギャラは・・・」

「もちろん上がるよ」

「どれくらい」

「だいたい1.5倍くらいにはなる」

「やります」ゆで玉子の表面のようにつると間子は言った。

「じゃあ、とりあえず、今から絶食して、明日の朝、浣腸して腸の

中のもの全部出してくれる」

「絶食ですか？」

「そう。」

もしウンチがペニスに付いちゃうと恥ずかしいだろ」

「ええ」

「浣腸はこの帰りに薬局で買って帰ればいい。後、できるだけ水分を多く取るように」

「わかりました。」

「だけど、ほんとにもう何も食べちゃだめなんですか？」

「少しくらいならいいけど。」

「だけど、早く摂らないと残っちゃうよ」

「ヤキソバ食べていいですか？」

「いいよ」俊夫が言うの間子は壁に掛けてある備え付けの受話器を手を取った。

「すいません、ヤキソバ大急ぎで」

十分後、ヤキソバが大急ぎでやってきた。

「なにが可らしいんですか？」間子が、にやにやと笑いながら缶ビールを飲んでる俊夫に聞いた。

「だって、そんな焦った顔を見たのは初めてだからな」

「だって急に絶食しろと言われたんで」言いながら眞子は箸を割った。

「早く食べないと、みんなにウンチ見られるぞ」俊夫の言葉に間子は一番上に乗った紅シヨウガを脇にやると、美味しそうにソース色に染まった麺を箸ですくった。

「うまいか？」

「おいしいです」間子は青海苔の付いた歯を見せながら俊夫に言った。

「確かにうまそうだなあ」

「あつ、すいません。食べますか？」間子はやきそばの皿を俊夫に差し出した。

「俺はいい。」

お前の食べているのを見ていただけでお腹がいっぱいになるよ」
ふふ、と笑った間子は再びヤキソバをすすり始め、俊夫が缶ビールを飲み干す前に皿を空にした。

「さっきの話。」

「アナル、本当にやるのか？」

「はい」

「人前でお尻の穴、ほんとならウンチを出す穴を曝け出して、そこに見知らぬ男のペニスを受け入れるんだぞ」

「大丈夫です」

「ほんとに？」

「ええ」

「恥ずかしくないか？」

「大丈夫です」

「そうか。」

「じゃあ、それでいい。」

俺、シャワー浴びてくるから」

シャワーを浴び、浴槽に浸かっていると間子が浴室に入ってきた。
もちろん、体には何もまといっていない。

「入れよ」

「はい」

カメレオンのようなグリーンの入浴剤に間子の体が透けて見える。

「そんなに稼いでどうすんだよ」

「田舎に帰って父と暮らします」

「またこっちに戻ってくるよ」

「大丈夫です」

「この世界で一度飯を食った人間は必ず、また戻ってくるんだよ。
美味くても、不味くても、ここの飯の味は忘れられないんだよ」
「大丈夫です」

「AVのジャンルで“熟女”ってのがあるんだ」

「熟女っていうことはお色気のある少し歳をとった女の人ですか？」
「お色気の“お”はいらないよ。」

「だけど、意味はだいたいあってる。」

俺達がAVのお世話になった頃にも“熟女”っていうジャンルはあることはあったんだけど、せいぜい女優は三十代までだったんだ。それが今や四十代は当たり前、五十代、モノによっては六十代もいるんだ。

順番によそじ（四十路）いそじ（五十路）むそじ（六十路）っていうんだけど、これが確実に売り上げを伸ばしているんだ。

大ヒットはないんだけどコンスタントに売れるんだ。

それも結構、若い、三十代、なかには二十代の客が買っていくんだ」

「本当なんですか？」

「藤堂さんが言ってたから間違いないと思うよ」

「どうしてなんですか？」

「そんなの俺に聞かれてもわかんないよ。」

まあ、ロリコンがいるんだから、その逆がいたっておかしくないんじゃないか」

「そのDVD、手に入りますか？」

「簡単だよ。」

「なんなら明日持ってきてやるよ」

「本当ですか」

「ああ」

「じゃあ、お願いします。」

「お金はちゃんと払いますんで」

「お金なんか別にいいけど、そんなのもらってどうするんだよ。ベテランの技でも勉強するのかよ」

「父に送ってあげるんです」

「お父さんに!？」

「はい」

「どうしてまた」

「母に死なれてからたぶん女っ気が全くなかったと思うんで」

「お、女っ気って。」

お父さんだつて男なんだから少しくらいは何かあつたんじゃないのか」

「いえ、父はそんなことができる人ではありません。」

それに、前にも言いましたけど、右腕を落としてからは・・・」

「そうか、わかったよ。」

じゃあ、明日現場に持つていくよ」

「ありがとうございます」

言つと間子はめつたに見せたことのない笑顔で俊夫の頬にキスをした。

4

「おまえ、自分の娘からＡＶをもらつたらどうする？」

「どうするって、ちよつと考えられないですね」

「まあ、優しいと言えば優しいんだけどな」

「変わった子ですよ。ホントに」

「まさしく。」

だけど、今うちの稼ぎ頭なんだから、うまくやってくれよ」

「ええ」

「これが頼まれてたやつだ」海田は紙袋からＤＶＤを取り出した。

“熟女大全集”

パッケージで六十歳くらいのお婆さんが垂れた乳を放り出してこっちに向かつて微笑みかけている。

「これを見て一体何をするんですかね」俊夫が海田に聞いた。

「決まってるじゃないか。」

これだよ」言つて海田は右手を何かを掴んでいる形にして上下させた。

「これでねえ・・・」

朝九時から始まった間子のデビュー二作品目の撮影は夕方五時を過ぎて終焉を迎えた。

結局、間子は三本の違ったペニスをヴァギナとアナルにそれぞれ受け入れた。

「お疲れやしたーっ」

一作目の撮影の後に行った同じもつ鍋屋で撮影スタッフ全員を集めて打ち上げが行われた。

「まさか二回目の打ち上げができるとはあの時は思わなかったよな」と海田はグラスに残っていたビールを一気に飲み干した。

「ほんと、靈様様ですね」

「藤堂さんは二匹目のどじょうを狙って早速テープの編集に付きあつてるよ」

「今度出れば本物ですけどね」

「出させるだろ」

「出させる？」

「藤堂さんならそれくらいやるよ。」

あの人はそういう人だ」

「シリーズにでもするんですかね」

「たぶんな」

若い撮影スタッフ達が一気飲みを始めた。

間子は輪には加わらず相変わらず無表情で、たまにグラスに口をつけるだけだった。

「間子ちゃんはお前という時は結構喋るのか？」

「いえ、あまり。」

喋ったかと思うとんでもないことばかり言いますから」

「ははっ、確かにな。」

で、この世界ですつとやっていくつもりなのか？」

「いずれは田舎に帰ってお父さんと暮らしたいらしいですよ」

「親孝行だよなあ。」

おまけにあっちの心配までしてあげるんだから」

「ほんとに、できた娘さんですよ」

鍋の中に仕上げる黄色い麺が入れられた時には間子以外の全員が出来上がっていた。

スタッフの中の宝田という一番元気のいい現場のムードメーカーが「いやーっ、今日はほんとにまいっっちゃいましたよ」と頭をかいた。

「なにがまいったんだよ」手にしているグラスの底に沈んでいる梅干しとかわからないくらい赤い顔をした海田が聞いた。

「僕今まで撮影中に立つちゃったことなかったんですけど、今日はもう、途中からどうしようかなと思うくらいビンビンになっちゃって」

一同爆笑。

「やつぱ、間子さんサイコーっ!!」

再び爆笑。

「それでは、今の宝田のコメントに対して間子ちゃん、一言お願いしますっ」海田の言葉に飛び交う、イエーッ。

衝立一つを隔てた隣のテーブルに若い女性だけの四人組がいるのを俊夫は店に入った時から知っていた。

その四人の一人が衝立の向こうから顔を覗かせた。

宝田の“ビンビン”に反応したのだろう。

掃き溜めに鶴、の間子をじっと見ている。

これまでの経験で、異性には何を言われようが、なんと思われようが、彼女たち、AV嬢たちは何とも思わないが、同性に対しては非常に敏感だった。どこか、心の隅っこに残っている、ほとんど失くしてしまった羞恥心の最後の一欠けらがツンツンと刺激される、そんな感じを俊夫はいつも持った。

間子は、その衝立からひょっこりと出ている顔をちらっと見たが、すぐに自分たちの輪の中に目を向けると、すっと立ち上がった。

イエーッ。男達の声が重なる。

「私はどちらかというと、黄色い麺よりはうどんのほうが好きなんです」

一同大爆笑。

店を出ると若いスタッフ達が海田と俊夫に「次行きましようよ」と誘ってきた。

海田はもつれる舌を必死に回しながら「よしっ、じゃあ、宝田の為にセクキャバに行こう。そこでもっと悶悶としてくれ。いわゆる生殺しだ。宝田、間違っても自分のパンツを汚すんじゃないぞ。もう中学生じゃないんだから」と言って俊夫に“あとは任しておけ”と目でサインを送った。

タクシーに乗ると珍しく先に間子が口を開いた。

「部屋に來ます？」

「いいのか？」

「散らかつてますけど」

二十分ほどでタクシーは民家が建ち並ぶ中に少し場違いな感じで夜の空に向かって伸びている細長いマンションの前で止まった。

エレベーターで3階に降りると間子の住処があった。

「ほんとにちらかつてるんで」

部屋はちらかつてなどいなかった。

但し、生活の臭いが全くしなかった。

人の臭いもしなかった。

不動産屋のおやじさんに連れられて物件を見に來ている、そんな感じがした。

「ビールでいいですか？」

「ああ」

「おつまみがお漬けものくらいしかないんですけど」

「氣を使わなくていいよ。」

「ビールだけでいい」

「すいません」

間子から缶ビールを受け取ると「たまに家で飲むのか」と俊介は聞いた。

「たまにですけど」

「二日に一回くらいか」

「回数は決めてないんですけど、たまに夜寝付けない時があるんで寝付けない？」

「ええ」

「どんなときにだ」

「自分の将来だとか、父親のこととか、あと、亡くなった母のことを考えると、朝まで寝れなくなる時があります」

「そうか」

「父と母は私をすごく愛してくれて・・・」

「そらそうだろう。」

俺だつてこんなことしてるけど、やっぱり娘は可愛いよ」

「ずっと三人、いつも一緒でした。」

だから、母が亡くなった時はすごくショックで、父もかなり落ち込みました。

田舎に一人残してこつちへ出てくる時はすごく抵抗があったんですけど、向こうじゃ、あまり働くところもなくて」

「じゃあ、一杯稼いで早くお父さんの所へ帰ってやんなくっちゃな」
「ええ。」

あつ、そうだ、お願いしてたやつ・・・」

「おう、持ってきたぞ」俊介はフローリングの床に置いた黒い小さなレジ袋を眞子に差し出した。

「あけてみるよ」

ガサガサと乾いた音を出して間子は袋の中から“熟女大全集”を取り出した。

「うわっ」間子は目を向いた。

「なに驚いてんだよ。」

それが欲しかったんだろ」

「いえ、このお婆さんのオツパイが・・・」

「早くお父さんに送って来てやれよ。」

首を長くして待つてんだろ」

「いえ、これを送ることは言つてないんで」

「急に送つて驚かすんだな。」

今流行りの“サプライズ”だ」

「ええ。」

「じゃあ、ちょっと行つてきます」嬉しそうな顔で黒い袋を手にした眞子はつつかけを履いて出て行つた。

缶ビールのプルトップを荒っぽくひっぱる。

1DKの間取り。

奥の部屋は畳が敷かれている。

ベットは置かれていない。

畳の上に布団を引いて毎晩寝ているのか。

携帯が鳴る。

「俊ちゃん」藤堂だった。「だめだ、映つてないよ、霊が」

「今終つたんですか？」

「ああ。」

何一つ、それらしきものは何も映つてなかった」

「やっぱり前のは何か、よくわかんないですけど、違つてたんでしよう」

「そんなつれないこと言ふなよ俊ちゃん。」

何かいい手無いのかよ」

「手つて・・・」

「社長にいくら電話しても繋がらないんだ」

俊夫はセクキヤバの中ではしゃぐ海田を想像した。

「それで俊ちゃんに電話したんだけど」

「藤堂さん、それは・・・」と言いかけて電話が切れた。

暫くすると海田から携帯が鳴つた。

「藤堂さん、なんだつて？」

「何も映ってなかったって」

「そらそうだろ。」

あんなの何かの偶然だったんだ。

五分おきに携帯に電話を入れてきやがって」

人の声と何かの音楽が入り混じって海田の声が聞き取りにくい。

「わかりました」と何がわかったんだと言われても返答の仕様がなかったが、どうせ酔っぱらってるから何も覚えてないかと俊夫は電話を切った。

間子が帰ってきた。

閉まりかけたドアの隙間から白く光るものが見えた。

「どしゃ降りです」

間子の髪が濡れていた。

「先にシャワー浴びます」間子が言うや否や耳の鼓膜を突き抜けるような稲妻が部屋を揺らした。

「藤堂さんの涙だよ」

「えっ？」間子は雨で黒くなったトレーナーを脱ぎながら言った。

「なにもないよ。」

早く入れよ、風邪ひくぜ」

間子はあつという間に身に纏っていた衣を剥ぐと浴室の扉を押した。

脱ぎ捨てたGパンのポケットから薄い紙がはみ出していた。

俊夫は立ち上がると缶ビールを冷蔵庫に取りに行くついでにその薄い紙を眞子が脱ぎ捨てていったGパンのポケットから取り出した。

宅急便の“お客様控え”だった。

“送付先”の欄に書かれている住所を見ると“郡”と“大字”という文字が収まっていた。

再び雷鳴が轟く。

名刺入れから一枚名刺を抜き取ると裏側の無地にボールペンを走らせる。

シャワーの音が止まった。

俊夫は慌てて名刺を名刺入れに戻し“お客様控え”を間子のGパンのポケットに戻した。

「あて買ってきたんで。

袋に入ってます」

浴室の扉の向こうに間子のシルエツトが見える。

玄関の脇に置かれていた雨で濡れたコンビ二のレジ袋にはサンマの缶詰めとスルメ、そして紙袋が一つ入っていた。

小さなテーブルの上にサンマの缶詰を置き、透明な袋に爪楊枝と一緒に入っていた割り箸を割った時、体にバスタオルを巻きつけた間子が出てきて、コンビ二のレジ袋の中に残っていた紙袋を取り出した。

俊夫は生理用品だと思った。

間子は紙袋を開けると中からカラフルなデザインが模された小さな箱を取り出した。

「いつもホテルなんで、持ってるのかなと思って」

俊夫は苦笑いを浮かべると、サンマの缶詰めの蓋を開けた。

5

間子のデビュー2作目“霊と一緒に背後からゴーっ!!”は結局前作ほどは売れなかったが1万5千枚売れた。立派な大ヒットだった。

“霊”は出た、というか無理矢理出されたというか、俊夫は海田と相談をして、考えないことにしよう、と決めた。

一度だけDVDを見てみたが、前作より却ってくつきりと人の輪郭が浮かび上がってしまい、一部週刊誌やネット上では“やらせでは?”という噂が流れた。

「おい、俊ちゃん、何かいい企画ないのかよ」

朝10時に始まった会議は何の結論が出ないまま5時間が経過していた。

「誰か関係者でも死ねばまた世間の目を引くんじゃないですか」

「そ、それいいなあ」言いながら藤堂はホワイトボードに赤いマジックで“死”と書いた。

「じよ、冗談ですよ、藤堂さん」言った後、海田の顔を見ると、こいつならほんとにやりかねないぞ、という顔を海田は俊夫に返した。「社長、他に何かないーっ」藤堂が少し甘えた声を海田に向けた。「思い切って路線を変更してみるとか」

「えっ、間子ちゃんを普通に売れっの？」

そら社長、誰が考えたって無理だよ。

あの容姿、あのスタイル、アナルって言ったって今なんか誰でもやるから何の珍しさもない、六十のお婆ちゃんだってサラダ油つけてやってんだから」

「水泳なんてどうっすかっ？」最近藤堂の腰近着のようにしていつも一緒に付いて回っている坊主頭の若い男が言った。

「水から上がった間子ちゃんの肩口に子供の霊が…これが本当の水子の霊、つてのは」

「バカヤローツ」と藤堂が怒鳴り声をあげると俊夫も海田も腹の中ですった。

しかし、以外にも藤堂は満面の笑みで「それ言いねえ、お前天才じゃん」と言つて急に拍手したかと思うと「よしっ、水で決定だ、会議はこれまで、社長、俊ちゃんと飯でも食つてきて」と机の上に一万円札三枚をひらりと置くとその天才と部屋を出ていった。

朝からコーヒーしか入っていなかった胃袋に冷たいビールが滲みこんでいく。

「藤堂さんも焦ってんでしょうね」テーブルに空になったグラスを置くと俊夫は海田に言った。

「そうだろうな。」

ひよっとしたら、あの腰近着を殺しに行ったのかもしれないな「やめてくださいよ。」

共犯になっちゃうじゃないですか」

平日の昼食の時間帯を過ぎた定食屋には俊夫たち以外客は誰もいなかった。

店員にビールのお代わりと冷奴を注文する。

「だけど、間子ちゃんは“霊”のことは知ってるのか」

「言葉には出さないし、そのことについて一度も話したことはないですけど、わかっていと思いますよ。マスコミの一部にも取り上げられたし、ネットの書き込みなんかにも一時はかなり書かれてましたから、全く知らないってことはないと思いますよ」

「そうか。」

まあ、田舎の親父さんに仕送りができればそれでいいんだからな「そうでしょうね。」

あの子にはそんなこと、何も関係ないですよ」

前掛けをした女性の店員がビールのお代わりを持ってきた。

「あつ、それでこの間言ってたんですけど、明日ちよつと休ませてもらいます」海田のグラスにビールを注ぎながら俊夫は言った。

「どこか行くのか？」

「ええ。」

たまには田舎の両親の顔でも見てこようと思ひまして」

「なんだ、間子ちゃんに触発されたのか？」

「そうでもないんですけど。」

前の会社辞めた時にいろいろと心配をかけたんで」

「今はこうやってバリバリと働いていますってか」

海田の言葉に二人で声をあげて笑った。

二本目のビールが空になったところで俊夫は海田と定食屋を出て駅前で別れた。

自宅には向かわなかった。

妻には撮影の立ち合いで今日は泊まりになるからと言って今朝家を出た。

コインロッカーから鞆を取り出すと夜行バスの時間まで少しあつ

たので駅前の喫茶店に入りアメリカンコーヒーを注文した。

スクランブル交差点を多くの人が忙しそうに渡っているのが窓の向こうに見える。

本当に忙しいのだろうか？

周りがみんな忙しそうにしているからとりあえず私も忙しい振りをしておこう、そんなところじゃないのか。

自分の意思で動いている人間はいたいどれくらいいるのだろうか。

結局、目に見えない何かに流されているだけなのか。

流されていないと不安なのか？

信号が点滅を始め、人が一斉に小走りで駆けだす。

人はやはり生かされているのか？

何かと常に関係性を持つて。

人は一人では生きていけない、学園ドラマの臭いセリフは当たっているのか。

ほんとに一人では生きていけないのか。

全ての関係性を否定して。

茶髪のウェイトレスがアメリカンコーヒーと伝票を無言でテーブルの上に置いていった。

伝票の端が茶色く濡れている。

砂糖もミルクも入れずカップを傾けるが香りも味も何もしない。

Nothing.

メールの着信を知らせる電子音が鳴る。

間子だった。

“次の撮影はいつくらいですか”

俊夫は返信はせず代わりに間子の携帯番号を打った。

「今どこだ？」

「自宅です」

「駅前のコーヒーのまずい喫茶店にいるんだ。出てこいよ
あ
のスクランブル交差点の前の じゃあ、待ってるから」

三十分後に間子はやってきた。

同じアメリカンコーヒーを注文する。

「いつもなにやってるんだ？」

「ほとんど家にいます」

「家で何やってんだ」

「特には何も。」

お茶飲んで新聞読むくらいです」

「テレビは見ないのか」

「ほとんど見ません」

「友達とかとご飯を食べに行ったりはしないのか」

「しません。」

「というか、私、友達いないんです」

「いない？」

「どうしてだ。」

「この仕事に就いてからか？」

「いいえ。」

前の会社の時も、たまに食事に行ったり映画を見に行ったりした人はいたんですけど、友達にはありませんでした。

仲良くなっちゃうと別れる時がづらいでしょ。いつかはきつと別れる時が来るんですから。

前にも言いましたけど、母が亡くなったとき、すごくショックだったんで。それから、友達を作ったり人を愛したりすることはやめたんです」

「そうか。」

「一人ぼっちで寂しくないか？」

「全然平気です」

さつきと同じウェイトレスが間子のアメリカンコーヒーを無言で運んできた。

「そうだ、ケーキ食べていいですか？」

「かまわないよ」

「じゃあ、ショートケーキください」間子はウェイトレスに言った。
「それと、イチゴは取っておいてください。私、イチゴ苦手なんで」
「!?」ウェイトレスの顔に初めて表情が浮き出た。「イチゴはいらないんですか?」

「はい。」

食べないのにもつたいないでしょ。

何か他の物に利用してください」

「は、はい」言うとうェイトレスは何度も首をひねりながら厨房の方に消えていった。

「あつ、どこか行くんですか?」間子は俊夫の足元に置いてある鞆を指差した。

「久しぶりに田舎へ帰ろうかなと思って」

「どこなんですか」

俊夫は新幹線の駅名を答えた。「新幹線に乗る金がないから夜行バスで行くんだ」

「ご家族の方は行かないんですか?」

「子供の学校があるから」

「あつ、そうですよね」

ウェイトレスが「お待たせいたしました」といって、イチゴの乗っていないショートケーキを持ってきた。

「わあ、美味しそう」間子はめったに見せない笑顔の下で小さな拍手をした。「いただきます」イチゴの乗っていないショートケーキの端っこをフォークで縦に割ると間子は大きな口をあけその欠片を放り込んだ。

6

運転手の到着を告げるアナウンスで目を覚ますと藍色の空がバスの窓から広がっていた。

外に出ると初夏だというのに少し肌寒さを感じた。

バスターミナルの自動販売機で温かい缶コーヒーを買おうと思っ

たが全部“つめたゝい”になっていたので、バスターミナルを出て駅の構内の売店で紙コップに入った温かいコーヒーを買った。

ここから在来線に乗ってある有名な温泉街がある駅でいったん降り、そこからバスに一時間ほど揺られてやっと目的の地に着く。

在来線の始発までにはまだたつぷりと時間があつた。

さすがに朝の五時から温泉に行く人間などおらず、ホームには、自分の背丈ほどある、商品が一杯に詰まった、竹で編んだ籠を脇に置いて椅子に座っている行商人らしい、顔中皺だらけのお婆さんが一人いるだけだった。

コーヒーを買った売店にもう一度戻り、おにぎりやお茶、そしてもし遭難した時のために板チョコを一枚買った。

目的地にコンビニがある可能性はなかったが、日が暮れてしまうと遭難してしまう可能性は無きにしも非ずだった。

在来線の列車がホームに入ってきた。

車内には行商人と思しきお婆ちゃん達の団体しかいなかった。

朝の早い時間に小さなポストンバッグを持っている俊夫をみんな最初はもの珍しそうに見たが、すぐに自分たちの会話に戻っていた。

紙コップのコーヒーが空になった時、窓から見える山の頂きの向こう側がやっと白みがかってきた。

行商人と思しきお婆ちゃん達の団体は、ヘリコプターから次々と降下していく特殊部隊のように、着く駅着く駅で、一人、また一人と下車していった。

在来線を降りるとつーんと硫黄の匂いを感じた。

さすがに「今晚のお泊まりあります」と言った看板を持った、髪を七三に分け黒いスラックスに白いYシャツを着たおじさんはいなかった。

駅員にバスの乗り場を聞き、コンクリートの塊に朽ち果てた木が突き刺さっただけのバス停を見つけた。

予想通り、バスは一時間に一本しかなかった。

三本目のタバコに火を点けようとした時、そのバスがえっちらおっちらghとやって来た。

誰も乗っていないのかと思ったら、行商人のお婆ちゃんほどは背中では曲がっていないかったが、見るからにお婆ちゃんと言った感じの人が何人が降りてきた。

旅館で働いてる人達だろうかと思っっているうちにバスは出発した。途中、ランドセルを背負ったほったの赤い子供が何人が乗ってきた。

「学校楽しいか？」と聞くと、赤いほったをさらに赤くして「楽しい」と濁りのない目を輝かせて言った。

子供達は一つのバス停でみんな降りて行った。

教師らしき女性が、窓越しに目が合うと微笑みながら会釈してくれた。

そして、バスに乗って一時間ほど経過した頃、運転手が、次の駅が終点であることを告げた。

後ろの席に座っていた自分以外のたった一人の乗客のお婆さんが

「こんなとこに何しに來ただあ」と聞いてきた。

「過疎の村を取材に來ました」

「あそ？」

あそつて九州の・・・

「お婆あさん、あそじゃなくて過疎」

「ああ、過疎ね。」

そんならもう、このあたりは人っ子一人いねえよ。野良猫の数の方が多い位なんだから」

「そうですか。」

じゃあ、お婆さんの家の周りには誰もいないんですか」

「そうだなあ、みーんな死んじやったからな」

バスが止まった。

運転手が振り向き、着きましたから、という顔を俊夫に向けた。

「お婆さん、着いたよ」

バスから降りるとお婆さんは「今日はあと二本しか駅に戻るバスはないから気を付けなよ」と言ってバスが走ってきた方向に向かって歩いていった。

「何しに来ただ」さっきまでハンドルを握っていた運転手だった。

「過疎の町の取材に来ました。」

ある雑誌の特集なんです」

「ここはほんとに何もなくて。」

見えないダムの底に沈んちまったような町だでえ」

「運転手さんもこの町の人？」

「そうだ。」

もう三十五年ハンドルを握つとるでえ」

「この町に若い人はいないの」

「いるわけねえで。」

こんなところおつても何にもないけん。

みんな出ていっただよ」

「そう。」

じゃあ、ちよつと歩いてきます」

「恐らく誰とも会わないでえ」

「わかつてます。」

だけど、せつかく来たんだから少しだけ」

「そうがぁ。」

バスはあと二本しかないからなあ」

「はい。」

さっきのお婆さんにも聞きました。じゃあ」言つと俊夫は会釈をして見えないダムの底に沈んだ町を歩き始めた。

歩いて暫くすると、トラクターが向こうからやってくるのが見えた。

農機具メーカーの名前が入った帽子をかぶった老人が物珍しそうにこつちを見る。

眼を合わせると恥ずかしそうにその老人ははにかんだ。

何だ、ちゃんと人がいるじゃないか、と俊夫は思ったが、その後、一時間ほど歩いてみたが、二羽のトンビが上空を舞った以外生き物の姿は見なかった。

道端に腰をおろし、駅の売店で買ってきたおにぎりにかぶりつく。厚手のシャツの下はいつの間にか少し汗ばんでいた。

ビールを飲みたいと思ったが、ペットボトルのお茶で我慢する。一服つける。

紫煙がすーっと空に上っていく。

もう諦めて帰ろうかと腰を上げかけた時、歩いてきた方向から一人の男がこっちに向かって来るのが見えた。

手にレジ袋を提げている。

なにか一升瓶のような細くて重く硬そうなものが入っているように見えた。

「こんにちは」俊夫が声をかけたが男はぴくりとも反応せず歩を進めた。

レジ袋の中はやはり一升瓶だった。

「すいません」もう一度俊夫が声をかけると男は、なんだ？という顔を俊夫に向けた。

「あのう過疎の町を取材しているんですけど」

「過疎？」男が近づいてきた。

「ぷーんと酒の匂いがした。」

「雑誌の取材なんです」

男は体を揺らしながら俊夫の頭から足の先までを嘗めるようにして見た。

「家に来るか？」男は真っ赤に充血した目で俊夫に聞いた。

「いいんですか？」

「ああ。」

「こっから少し歩くけどな」

言つと男は「あっちだ」とレジ袋を持っていない方の手を上げた。しかし、毛玉のたくさんついた薄汚れたセーターの腕の部分は重

力に吸い寄せられるように、だらんと垂れた。

饅えた匂いがした。

木が腐ったような匂いと人間の汗と老い、そしてアルコールが分解される時に発する独特の匂いが混ぜ合わさったような匂いだった。「あがつてくれ」男は俊夫に言った。

「お邪魔します」と言ったもののお邪魔するスペースがその六畳ほどの畳の部屋にはなかった。

小さなちゃぶ台が部屋の真ん中に置かれ、その周りには、割箸を突っ込んだままのカップラーメンの殻や、ビールの空き缶、そしてこぼしたコーヒーでも拭いたのかまっ茶色に染まったタオルなどが散乱していた。

「酒飲むか？」

「いただきます」

男は片腕で、買ってきたばかりの一升瓶の蓋を器用にはけると、ちゃぶ台の上に置き放しになっていた湯呑に酒を注いだ。

「飲んでくれ」

湯呑を手にとると、透明の酒に茶柱が浮いていたが、気にせず俊夫は口をつけた。

「ちよつとしょんべんいつてくるから」言い残して男は部屋を出ていった。

ぐるつと部屋を見回す。

箆笥の上に茶色い封筒が置いてあった。

中から一万円札が何枚か覗いている。

立ち上がり、そつと封筒を裏返すと、間子の名前が書かれていた。しかし、住所は書かれていなかった。苗字と名前だけが黒いボールペンで書かれていた。

トイレの水を流す音が聞こえた。

封筒を箆笥の上に戻し、ちゃぶ台の前に腰を下ろそうとしたとき何かを踏んだ。

ゴミを掻き分けると“熟女大全集”が出てきた。

パッケージは破られていた。

「おお、悪いなあ」

慌ててゴミで“熟女大全集”を覆い隠す。

「お父さんも吞んでください」

男は畳の上で転がっていた湯呑を手にとるとふつと息を吹きかけ俊夫の前に差し出した。

「お父さん、お一人ですか？」言いながら酒を注ぐ。

「ああ。」

娘がおっただけで出ていった。

母ちゃんは五年前に死んだ。

腕は落どすし、今は酒だけが楽しみだ」

返す言葉がなく俊夫は意味のない笑みを男に向けた。

「取材つてなんだ？」言うとなんか一気に湯呑の酒を飲み干した。

「主に過疎の町を回っているんですけど、その町の古いしきたりや言い伝えなんかを色々・・・」

「そうがぁ、まあこの町は何にもねえけど一つだけ言い伝えとか、昔はこの町にもあったことなだけ・・・」

「なんなんですか？」言いながら俊夫は男に酒を注いだ。

「見ればわかると思うんだけど貧しい村だぁここは」

「ええ」

「昔は今と違ってどこも子供がたくさんいたけど、どうしても貧しくて育てられない時は間引いたんだ。」

「お兄さん、間びぐって言葉知ってるが？」

「ええ。」

他の町の取材でも聞いたことがあります」

「やっぱりそうだんべ。」

昔はそんなに珍しいことじゃなかったんだあ。

だから、どこの中でも座敷わらしなんかうようよといたんだ」

言うとなんか自分の冗談にワハハと笑い、又、一気に湯呑の酒を飲み

ほした。「今でこそ、都会の人たちは、いいことがおぎるからって座敷わらしが出る家ばかりに行ってるけど、考えてみればひどい話だ。生まれてすぐに殺された子供の霊をば見て自分にはいいことが起きるように願ってなあ、ほんとおそろしい話だよ」

「おとうさん、どうぞ」俊夫が男に酒を注ぐ。

「お兄さんよ、じづはなあ、うちの娘も間引かれたんだよ」
「えっ!？」

「まあ、お兄さんももっと呑みなよ」男は俊夫に空けなよと一升瓶の先で合図し、湯呑が空になったのを確認するとどぼどと酒を注いだ。

「あの子は川をどんぶらことんぶらこと桃太郎のようにして流れてきたんだ」ワハハと男は自分の冗談にさっきと同じ笑い声をあげた。
「いまだにあんどのきのあの子の目は覚えてるよ。」

生まれて間もないのに、びっくりしたような、とんにかく、助けでくれっていう眼をしてなあ」

俊夫は入れてもらったばかりの湯呑の酒をグイッと呷った。

「お兄さん、いい飲みっぷりだあ、さあ、もういっちょいごう」

男に酒を注いでもらうと俊夫は「それからどうしたんですか」と目を輝かせて男に聞いた。

「子供がいながったがらあ、そのままうちの子供にしただ。名前も間びがれた子供だから“間”の“子”と書いて“間子”にしただ」

俊夫は一息で湯呑を空にした。

「だんけど、いい子に育ってくれて、隣町の高校さ通っていだんだけど、成績もずっと一番で、学校の先生さ、東京の大学さ行けって言っただけで、うちは貧乏だから、あの子氣いつがって就職したんだ」男は、俊夫が面接をした時に見た間子の履歴書に書かれていた一部上場企業の名を口にした。

「この不景気だつて言うのに、ボーナスもらったつてこの間もたくさん金送ってきてくれて、やっぱり、有名企業はすごいさあ」

「たまに帰って来られるんですか」

「いんや」

「寂しくないですか」

「そら寂しいだ。会いたいだよ。だけど、だけど、いつかはこっちさ帰って一緒に住んでくれるって言ってくれてるんでそれまでの辛抱だ」

「そうですか。 あつ、お父さんどうぞ」俊夫は男の湯呑が空になっ
っているのに気付き酒を注いだ。

「あでがなんにもねえなあ」男は俊夫の酌を受けながら部屋の中を
見渡した。

「あつ、お父さん」俊夫は持つてきた鞆を開け中をかき回した。「
チヨコレートならありますけど」

「チヨゴレード？」

「ええ、板チヨコです」

「チヨゴなんて久しぶりだなあ、甘いものなんか長い間食べてねえ
んで、もらつでええがな」

「どうぞ」俊夫は板チヨコを銀紙の上から半分に割ると男に渡した。

気がつくと在来線の列車の中だった。

膝から下が重く、顔の表面は熱の膜に覆われていた。

男とチヨコレートを食べ始め、一升瓶が空になったとこまでは覚
えていたが、どうやって家を出て、どうやってバスに乗り、どうや
ってバスを降りて在来線に乗り込んだのか全く覚えていなかった。

窓の外はすっかり陽が落ちていた。

山間の民家の明かりがちらちらと輝いている。

喉が渴いたので鞆からペットボトルを取り出し、底の方に少しだ
け残っていた昼間の残りのお茶を喉に流し込んだ。

携帯に着信を知らせる青いランプが点っていたが今は人と話す気
がしなかった。

「白い手袋ーっ」突然車内に人の声が響き渡った。
声の主はすぐにわかった。

坊主頭にブルーのキャップをかぶった高校生くらいの男の子だった。

「白い手袋——」

立ったまま、車両の両側の扉を行ったり来たりしている。

おそらく知的障害児だろう。

親と思しき人や付き添いの人はいなかった。

「白い手袋——」

列車が駅に停車する。

乗客が乗り込んでくるとみんな最初はその男の子を見たが、暫くすると気にもなくなつた。

列車が動き出す。

「白い手袋——」男の子は動きをずっと止めなかった。

何度も同じ吊り広告を見ては何度も両側の扉から外を眺めた。

“急行列車の待ち合わせのため次の駅でしばらく停車します”のアナウンスの後、列車が駅に到着すると、その男の子は下車していった。

少しほつとして、男の子のあとを目で追うと、その男の子は一番先頭の車両の脇で立っている車掌を見つけるとつかつかと歩み寄って行って何かを話し始めた。車掌はうんうんと首を縦に振っている。向かいのホームに急行列車が到着した。

何人かの人が二両の車両を行き来する。

やがて急行列車が先に発車した。

男の子はずっと車掌と話をしていたが、発車を知らせるベルが鳴るとまた戻ってきて定位置に付いた。

「白い手袋——」

扉が閉まる。

男の子とずっと話をしていた車掌が動き始めた列車をホームから見送る。

進行方向に向かって“よし”と指差した手には純白の手袋がされていた。

「社長さんからよ」という妻の声で目が覚めた。

「昨日はすいませんでした」頭蓋骨の中で脳みそがシャッフルされているのを感じながら必死で言葉を絞り出す。

「だいぶお疲れのようだな」

「久しぶりに帰ったんで」時計を見るともう少しで午前中が終わるところだった。「周りの親戚の人たちが出てきちゃって昼間から飲みすぎました」

「もう一日休んでもいいよ」

「ほんとですか？」

「ああ。」

その代り、明日、朝八時からミーティングだ」

「藤堂さんですか？」

「正解。」

この間の付き人の小僧が言っただろ。

あれで行くって決まったらしいぞ」

「わかりました」と言って俊夫は電話を切ったが、社長の言葉など全く頭には入っておらず、再び深い眠りに落ちた。

「携帯鳴ってるわよ」この日二度目の目覚めはまたしても妻の冷たい声だった。

間子からだった。

「今日、誕生日でしたよね」

部屋のカレンダーを目をしょぼめて見ると、確かに四十三回目の誕生日だった。

「会えますか？」

「ああ・・・」

「じゃあ、このあいだの喫茶店で」

歯を磨き髭を剃り服を着替えると「晩飯いらないから」と家を出

た。

「あら、あなた、今日誕生日よ」という妻の声を期待したが何もなかった。

喫茶店に入ると間子は既に来て待っていた。

「すいません、急に」

「いいよ、どうせ暇だったから」

「お疲れのようですけど」

「昼間の酒は効くよ」

「お父さんとお母さんはお元気でしたか」

「俺よりはな」

ウエイトレスが注文を聞きに来たのでビールを頼んだ。

「あのうこれ」間子が突然、足元に置いていたバッグから有名百貨店の包装紙に包まれた封筒くらいの大きさの包みをくれた。「お誕生日おめでとうございます」

「おう、悪いなあ」

「何を買っていいのか分からなかったんで・・・」

俊夫ははにかんだ間子を初めて見た。

「誕生日プレゼントをもらったなんてほんと久しぶりだよ」

「そうなんですか？」

「俺もお前と一緒に友達なんてほとんどいないんだ。

ただ大きな違いは、お前は自分から友達を作ろうとせずに結果いないだけで、俺は友達をつくろうとしたんだけど結果できなかったんだ」

ウエイトレスがビールと付け出しのピーナッツを持ってきた。

「今日はケーキ食べないのか。イチゴののっていない」

俊夫の声を聞いて戻りかけたウエイトレスがどうするんですかという表情を間子に向けた。

「じゃあ、チーズケーキにします」

「チーズは抜いてもらわなくていいのか？」

ウエイトレスは???という顔をしたが間子が「チーズケーキお願

いします」と言うて戻っていった。

「明日の打ち合わせは聞いているか」ビールの泡を口の周りに付けて俊夫は聞いた。

「はい」

「内容とかは何か社長言ってた？」

「今度は何か水着を着て撮影があるかとか」

「そうなのか。」

今度はお尻はするのか？」ピーナッツを口に放り込みながら俊夫はビールを傾ける。

「いえ」

「どうしてだ。」

ギヤラはそっちの方がいいだろう」

「だめなんです」

「なにがだめなんだ？」

「いえ、その、何かが違うかなって・・・」

「まさか痔になったってことはないだろうなあ」

「そんなことはありません」

間子がチーズケーキを食べ終わると喫茶店を出た。

「プレゼントの代わりに何かおこるよ。」

もつ鍋以外で何か食べたいものないか」

「え？」

「たまには違うもの食べよう」

「お鮎はどうですか」

「それにしよう。」

今日はしつこいものはちょっと無理だ」

繁華街に出て一番最初に目にとまった鮎屋の暖簾をくぐった。

カウンターだけの店だったが小ぎれいで小ざっぱりとしていて、

お手吹きを出してくれたおかみさんの笑顔が最高だった。

俊夫はお造りの盛り合わせをあてに熱燗を呑み、その横で間子は黙々と鮎を食った。

「少し呑むか」俊夫はお猪口を間子に差し出した。

「いえ、明日早いんで」

「そうか」

「久しぶりの里帰りはどうでしたか？」間子はきゅうり巻きのきゅうりをウサギのように齧りながら俊夫に聞いた。

「べつにどうってことなかったよ。」

あつ、そうだ、帰りの列車の中で・・・

俊夫は白い手袋の話をした。

「その子にはすごく印象に残ったんでしょねえ、その白い手袋が」
「そうなのかなあ。」

列車の中で連呼してたよ」

「白い手袋は白い手袋なんです」

「そんなの当たり前じゃないか」言つと俊夫はおかみさんに熱爛のお代わりをたのんだ。

「白い手袋以外の何ものでもないんです。」

「言いかえればそこにはそれ以外何もないんです、なにも・・・」
「なにもない・・・Nothing・・・か・・・」

お造りの盛り合わせだけで三合の酒を呑んで店を出ると、俊夫にはとても間子を抱くだけの力が残っていなかった。

「プレゼントありがとうな」俊夫は手を上げ流しのタクシーを止めると間子に一万円札を渡した。

「すいません。」

かえって悪かったみたいで」

「明日早いから遅刻しないように」

タクシーの扉がどうぞと口を開けた。

「間子ちゃんさあ、俺って、俺ってさあ、お前の何なんだ？」

後ろの車が早く乗れとクラクションを鳴らす。

「白い手袋です」

間子はいつもの無表情で俊夫に答え「じゃあ、おやすみなさい」

と滅多に見せない類笑みを言葉に添えるとタクシーは夜の帳の中をスローモーションのように走り去っていった。

8

社長の笑い声がこめかみに響く。

「俺も長い間生きてきたけどさあ、誕生日のプレゼントに女から“おこめ券”をもらった奴なんて初めて見たよ」

「てつきり、箱の形と大きさからライターかなって思ったんですよ。昔、付き合っていた彼女にもらったことがあったんで。

まさか“おこめ券”だとは夢にも思いませんでしたよ」

「だけど・・・」社長はまた大笑いして言葉にならなかった。「けど、やっぱりあの子は優しいんだよ。お前は結婚してる。けどどうみても安月給だ。奥さんもいてお子さんもいて、きっと暮らしていくのがたいへんなだろうなあ、ってそこまで考えてくれてその結果が“おこめ券”だったんだよ」社長は自分が吐いた言葉に再び大笑いした。

「それなら給料上げてくださいよ」俊夫は鼻を膨らませて言った。

「それとこれとは話が別だよ」社長は笑いすぎて濡れた目を手でぬぐいながら言った。

「なにか楽しそうだな」藤堂が店に入ってきた。

いつも打ち合わせが行われる藤堂の会社のビルの斜向かいにある喫茶店で、俊夫と海田はモーニングを食べていた。

「八時になったら始めるからね」それだけを言っていると藤堂は踵を返し店から出ていった。

「藤堂さんえらく真剣でしたよね」俊夫は苦いコーヒーを喉に流し込んだ。

「そらそうだろう。」

今回、たまたま間子ちゃんがさあ、ああいう形で売れたけど、A V業界全体で見るとかなり厳しいからな。

ネットでもただで無修正が見られる時代だぜ。若い奴ら

が、わざわざ金出してボカシの掛かつてるA Vなんか買っわけないだろ。

この間、ある小売店の購入者年齢のデータを見せてもらっただけど、メインの層が二十代から四十代に移ってきて、特に五十歳以上が無茶苦茶増えてきているんだって。

パソコンをうまく操れない世代が店に夜な夜な通ってきてるってことだよ」

「なるほど」言うとき俊夫は店の時計を見た。「そろそろ行きましようか。遅れるとまた訳の分からないこと言いだしそうですから」

「そうだな。で、間子ちゃんは？」

「直接来ていると思いますよ」

「そうか、それならいいんだけど。」

いや、ひよつとして、おこめ券を贈ったことに対してすごい罪悪感を感じて『ああ、せめてデパートの商品券にしておけば良かったわ』って部屋の片隅で肩を落とし泣いてんのかなと思って」

社長と二人けたけたと笑いながら店を出て斜向かいの打ち合わせを行うビルの会議室に入ると、間子はまだ来ていなかった。

「どうしたのかな？」俊夫は携帯の番号を押したが間子は出てこなかった。

「間子だけに“ま”が差してどっか行っちゃったんじゃないのか」海田は自分の冗談に受け独り笑う。

「さあ、始めようか」藤堂が入ってきた。「あれ、間子ちゃんは？」

「すいません、少し遅れてまして」俊夫が答える。

「じゃあ、時間がないから先に始めようか」

藤堂が言うと、前回の打ち合わせにもいた坊主頭の付き人が立ち上がり「それでは手元の資料に沿って進めていききたいと思います」と言っってホワイトボードの前に進み出た。

「おい、あいつ殺されなかったんだ、良かったよな」海田は俊夫の足を蹴ると小さな声で言っって笑った。

坊主頭はじろつと海田を睨んだ。「それではまず今回の作品のコ

ンセプトですが、それは“水”です。この間の会議でお話ししました通りプールの中でのプレイを中心とした作品にしたいと考えております」

「プールの中でのプレイってあり来たりじゃないですか」海田が手を挙げて坊主頭に言った。「どうせなら海で波にもまれながらやるとか、川のせせらぎを聞きながらやたら激しい男3女1の4Pをやるとか、結構アオカンのジャンルは根強いファンが多いですから」

「川か」藤堂が突然立ち上がった。「いいよ。社長それいいよ。川だろ川っ」藤堂はホワイトボードの前まで駆けていくとマーカーで波線を何本も書いた。「いいよっいいよっ、川だーっ！」「ホワイトボードは波線で埋め尽くされていった。

「川ね」ポツリと俊夫は吐いた。が、その言葉に突然深く眠っていた記憶が蘇った。

記憶のスクリーンに出てきたのは、間子の父親だった。

「ほんとにいい子で勉強もすぐ出来ただけど、唯一水泳だけが苦手だったなあ。まあ、しがたないんだけどなあ。生まれてすぐに水の中に捨てられて、どえらい目に遭っただんからなあ」

「俊ちゃん」藤堂の声で俊夫は我に帰った。「間子ちゃんはどうしたんだ？」

「いえ、それが連絡が取れなくなっつて」

「部屋で手首切って死んでねえだろうなあ。彼女以外の関係者が死んでくれるとかえって作品に箔が付いていいんだけど、彼女に死なれるとちよつとなあ」

「ちよつと見てきます」海田は立ち上がるとお前も、と俊夫に目で合図をし、二人で藤堂に一礼すると会議室を出た。

「携帯出ないのか？」乗り込んだタクシーの中で海田は俊夫に聞いた。

「出ません、と言うか、もう出ないですよ」

「どういう意味だ。ほんとに“ま”が差したんじゃないだろうなあ」

「いや、あの子はそんな子じゃないです」

「じゃあ、ただの“ま”抜けか？」

「いえ、違います。」

なににつけても“間”が悪いんです。

ただそれだけです」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1227/>

熟女大全集

2011年9月25日03時28分発行